

## 書 評

北原 淳、『タイ農村社会論』勁草書房、  
1990、図版 8p+viii+494 p. (文献目録  
[和・欧・タイ文], 索引つき)

### I

周知のように、チャクリー改革(1893~1915年)以降、タイは政治・経済・社会のあらゆる面で現代につながる近代的機構を整えた。現代タイ農村を理解するために、農村をこの改革以来の歴史的時間のなかで全体的に捉えようとする視点が生じても当然である。だが、学際的にならざるをえないその研究を、一人の研究者が遂行するのは容易なことではない。

本書は、著者の20年にわたる経済史研究、農村調査研究にもとづく論考を収めたタイ農村社会研究集成である。旧稿が軸をなしてはいるが、書下ろしや修正を加えて体系的に編集されており、各々の章はひとつになって百年間におけるタイ農村社会の歴史的形成と経済構造を主とする今日の変容過程までを描きだす。しかも農村と国家資本との多様な関係をも視野に収めつつ、その中の普遍的・傾向的变化を探ろうとする野心的な労作である。

著者は近代タイの農民と農村を小農民、小農民社会として把握し、その歴史を①形成段階(1870~1920年代)、②分解段階(1930~1960年代)、③変質段階(1970年代以降)に三分する。①と③の段階が本書の支柱である。①は農村社会の制度史的考察、社会史的考察、③では戦後の商品経済に巻き込まれた小農経営の分化・分解および工業化・都市化にともなう小農民の兼業化と賃労働者化の過程の考察が中心となる。

本書は序章と終章を除き、四部で構成された本編12章より構成される。なお、序章では近年のタイ人研究者による社会経済史学の理論概説が紹介されており、簡便な学説史となっている。

第I部 農村政策史の考察：チャクリー改革と小農

### 民層の形成

第1章 過渡期の小農民社会：農村の社会関係と集団性の諸類型

第2章 土地政策の変遷と小農民層創出の方向

第3章 大土地所有制の否定と小農民的土地所有の定着：トゥン・ドンラコーンの土地係争を中心に

第II部 農村社会史の考察：小農民の社会形成

第4章 「屋敷地共住集団」と集落の形成

第5章 親族関係の形成

第III部 小農経営の考察：開発と小農経営の再編過程

第6章 1970年初頭の中部タイ一米作農村の農民層分解

第7章 国営入植地農家の経済的階層格差

第8章 開発政策と小農経営：養蚕開発事業の場合

第IV部 社会変動、就業構造の考察：小農民の賃労働者化

第9章 地域労働者市場の発展と小農民の変質の諸類型

第10章 1970年代における中部タイ一農村の変化

第11章 チェンマイ盆地における地域労働市場と兼業化

第12章 東北タイ農民の地方都市への出稼ぎ労働

もともと関心領域を異にするのみならず浅学でもある評者にとって、歴史、社会学、経済学にわたる先行研究の問題点を検討し、大部のデータ、詳細な記述によって議論を進める本書を要約することは無謀に近い企てである。したがって、以下では全体の「粗筋」を著者自身のことばを援用しつつ概観した上で、若干の感想を述べるにとどめたい。

### II

第I部は、著者のいう小農民とその社会が国家政策による歴史的産物であることを説く。近代化以前の旧サクディナー社会には、国家の徭役義務を担う「自由民」や有力者に従属する「奴隷」がいた。ボーリング条約(1855年)からチャクリー改革の政策過程は、彼らを解放し、絶対王制国家の官僚制下に直

接的に治め小農民的土地所有を保証した（1章）。その影響下で中間支配者の支配下にあった複数の不自由身分の農民が一元的小農民として村落社会を形成してゆく。その経緯は「小農民的土地所有政策実現の過程」（2章）、小農民育成の方向を明示する土地係争の歴史的事例（3章）においてそれぞれ検証される。かつての王族、貴族、有力者主導の入植・土地所有は、「国家承認済み」の小農民自身に委ねられる形で増拡大してゆく。

第Ⅱ部では親族組織から集落・村落形成の過程と類型を社会史の事例から再構成する。まず「屋敷地共住集団」を集落の形成・興亡を理解する核概念として定式化（親子間での土地の共同保全にもとづく屋敷地の共住と耕地の一時的貸借関係から成立する集団。親と子の複合家族的単位）し、その複合体として今日にいたる村落社会が形成されていることを実証する（4章）。さらに、トラクーンとよばれる出自カテゴリーに焦点をあてて親族の形成過程を論じる（5章）。

小農民社会の純然たる現状考察は第Ⅲ、Ⅳ部にあてられている。チャクリー改革の結果として形成された小農民が、1970～80年代の伝統的小農経営の内部的崩壊（とくに土地サイクルの崩壊）と国家、資本による外部的再構成（「緑の革命」）を通じて農民層分解をとげ、その一部は80年代の工業化と労働市場の展開によって相対的過剰人口、賃労働者に転化して消滅しつつある過程を明らかにする。第Ⅲ部での分析は、農業内部の土地所有、労働力の賦存状況の変化による階層格差の出現を重視する（とくに恒常的土地不足世帯の出現を強調する6章）。経済的階層分化、経営様式の分析は、米作農村ではなく国営入植地の養蚕計画現場においてなされている（7、8章）。

第Ⅳ部は、農業と農村の変化が農村内部の土地や労働力の賦存状態よりも、外部の要因にあることを強調する。現代の小農民分解は農外就労化、兼業化を伴いつつ進行しているので、資本との関係は農業経営内部だけに限定されない。さらに中・北・東部のデータ比較が明らかにするように、農民の賃労働者化が進行しながらも、その量的・質的变化は階層間、地域間で不均等である（9章）。北部チェンマイ県における農村の就業構造、農業経営を主とす

る農民層分解（11章）、東北部ローイエット県での出稼ぎ者追跡調査報告（12章）は共にその検証事例となっている。

タイ農村のもっとも典型的な「現在」を、著者の心情とともに伝えるのが、中部農村の70年代と80年のデータを比較した第10章かもしれない。村では若年層、世帯主の一時的他出移転によって「親族間の連帯が弱まり、村落社会が欠損家族を収容する能力を低下させた結果」戸数、農業人口ともに減少し、農外就労者が増えた。しかも、村内農業の沈滞と兼業化の背後には村外者による土地買占めと「資本主義的農園化」が進行しているという。

国家の支配体制と小農民の土地所有、定住経過を検討した第Ⅰ部では、現地語一次史料が駆使されている。第Ⅱ～Ⅳ部までは、15年間にわたる特定地域・集落での臨地調査によって著者自らが蒐集したデータとその分析結果が中心となす。ここで直接、間接的に引用されている資料は、少なくとも中部三県（6カ村）、東部二県（2市）、北部一県（2カ村）、東北部二県（2カ村）におよぶ地域からのものである。

### III

本書は昨今めだつ「通りすがり」の調査報告ではない。タイの歴史と現状を往復した充実の一著である。著者の主たる調査地は近代化の影響を直接受けた中部タイであるが、読者は1972年から87年にわたる北、東北部を含めたタイ米作農村についての社会・経済史的基礎データをも利用できる。わが国では単独の臨地調査にもとづくこの種の著作は決して多くない。非常に貴重な業績だといえよう。

ひと口にタイ農村といっても相異なる二類型がある。著者によれば権力者支配から自由—「未開」な村と、支配によって再編された「文明的」な村である（4頁）。全体制的小農民はチャクリー改革によって法制的意味を与えられた存在（460頁）であるゆえに、本書が扱う小農民社会は「文明的」な村である。

この新鮮な視点は、中部を主な調査地としてきた著者自身の経験にもよるものであろう。だが、素朴な興味もわく。タイ農村を小農民社会と一括して議

論する場合、いわば「出自」を異にする兩類型の村落は質的に同様の変容過程を経てきたのだろうか。地域労働市場の内容差が生じているのは理解できるにしても、すべてが行政村である今日、「出自」の文化的差異は収斂しているのか。チャクリー改革下での国家の小農民創出策による農民の直接支配を強調するために、本書は共同体的な自然村についてはほとんど言及しないが、類型が異なる（かつての）村落間の「視界の相互性」や国家権力による村落社会の分節化過程の検討は、「事例研究の具体的データのなかに歴史的変化を探る」ためにも重要であろう。

編集の性格上いたしかたないのだが、各章の議論は各々に完結性を強くもつため、全体を通読して著者が企図する歴史的な展開過程を明瞭な形で読みこめない。また、現状の農村の記述においても調査村自体が視覚的にイメージしにくい。無用な *exoticism* や牧歌的情景を望むわけではないが、本書は小農民の歴史的運命にこそ感心を寄せており、その暮らしの奥行きや臨場感をハードなデータでばっさり捨象しているような印象を受ける。

本書では地域間での比較もなされているので、いく分唐突にでてくる「中部タイ的」、「東北タイ的」類型、さらにはエスニシティ等の用語については若

干の説明が必要だろう。事例データについて著者は「特定村落の事例が常に村外の全国的・地域的傾向と意識的に対照されなければならない」（10頁）と主張されているだけに、個々の記述には隔靴搔痒の感が少なからず残る。

南部タイについて本書は沈黙しているが、全体を鳥瞰させる260頁の農村部の所得分布比較統計と南部の貧しさという記述の妥当性はどうか。「貧しい東北」を示すには今日なお有意かもしれないが、全体を眺望する数少ないデータだけに旧さがめだってしまう。

近年のタイ農村の変貌ぶりには瞠目すべきものがあり、この変化を農民の生活現場において先駆的に扱った本書の刊行は誠に時宜を得たものといえる。評者の愚見は別として、現代タイ農村を成立させる内・外部の要因を考察の射程に組みこみ、さらに共時・経時的な分析の統合を試みている本書は村落レベルから東南アジアの社会変動を扱う、著者独自の「史的地域研究」の輝かしい成果である。単にタイ研究者のみならず、東南アジア研究者、そして農村社会学に関心をもつ研究者に広く精読されることを祈ってやまない。

（林 行夫・国立民族学博物館）